団結
為同志会
栄作

昭和三十九年十一月九日、両院議員総会に於いて自民党総裁に選任された直後の佐藤栄作元首相の揮毫

自由民主党同志会新報

発行所
自由民主党同志会
発行人 早川 [illegible]
編集責任者 赤羽祐広
〒100-0014 東京都千代田区永田町1-11-28
相互永田ビル８０１号
電話 03（5521）1755　FAX 03（3581）5300
奇数月25日発行　購読料1カ年 5,000円
みずほ銀行 町村会館出張所 普通口座１４６１７６３

平成20年は新しい「時代」となるか 新しい「時代」にするか

十四年ぶりの越年国会となった。細川政権の平成5年、1993年から翌年にかけて延長された第128回臨時国会以来のことである。今回は、新テロ対策特別措置法案を成立させるための延長であることは周知のとおりだ。この大事な時期に防衛省問題と年金問題、C型肝炎訴訟問題は大きな阻害要因となっている。これらは前時代が生み出した妖怪であるがゆえに、並の決意では退治できそうにない。

今年の干支は子、十二支の初めに位置する。そのためか、いつもの新しい年にはない心づもりを意識する。自由民主党同志会が今までの体質を刷新して新しく出発するにあたり、「今の時代」に一歩踏み出すとき「前の時代」を振り返ってみるのも無駄なことではあるまい。

「平成」のいま「昭和」はまだ終わっていない

振り返って、昭和20年、1945年、日本は敗戦を受け入れた。それまで日清戦争、日露戦争と外国との戦いに敗れた経験のなかった日本は、悲憤屈辱の敗戦を味わった。しかし、未曾有のこの出来事は明治維新につぐ次の新しい時代の幕開けに違いなかった。帝国日本から民主日本への移り変わり。未知の時代を迎えたわけだが、混乱した戦後すぐの日本の存在をアメリカとの困難を極めた折衝のなかで守り抜くことは並大抵であろうはずはない。欧米をよく知る外交官としての体験と知恵を生きぬいた吉田茂首相（当時）ならではの成果にほかならない。

「昭和」は一度つまづきはしたものの、新しい憲法とともに歩き始めたが、いつの間にか歴史上の一区切りにすぎなくなった感がある。「昭和」という時代は「破壊」の時代。秩序はその中から生まれるはずだが、「平成」に変わっても、なかなか生みには至らない。教育、厚生、産業、防衛、行政、国会と、むしろあらゆる分野において破壊がいまだ終わりを見ないどころか進行中である。波乱に満ちた困難な時代は継続されている。

困難と騒乱と興奮の「昭和」をめぐる

太平洋戦争に突入し、そして終戦。マッカーサーがパイプを銜えて厚木に降り立ってわが国の国家体制が大きく変わることになる。海外からの引揚者が頭からシラミ退治のDDTを吹きつけられてまっ白になって鈴なりの列車で故郷に向かう。街には戦争孤児の浮浪児が並び、パンパンと呼ばれたGI相手の売春婦が立ち並び、人びとは廃墟と化した焼け跡でスイトンをすすり食らう。戦争を知らない世代には想像もつかないことだろう。

昭和21（1946年4月極東国際軍事裁判、いわゆる東京裁判が始まる。6・3・3、新しい小・中・高の学校制度改革が施行されたのもこの年。昭和25年には朝鮮戦争が特需景気をつくり出す。そしてマッカーサーが解任されて戦後の第一段階が終わった。翌年、吉田茂全権がサンフランシスコ講和会議において日本首席で「和解と信頼」の講和受諾の演説を行い、ここに実質的に日本はやっと立ち上がることができた。

しかし国内は荒れる。昭和27年5月1日、都学連を中核とし、朝鮮連盟系朝鮮人と日雇い労働者約6000が警官隊と正面衝突、警官の発砲もあって多数の負傷者を出す事件が発生した。いわゆる血のメーデーだ。そして35年、「60年安保闘争」。安保反対デモ隊2万7千が国会に突入占拠。この年、日本社会党の浅沼稲次郎委員長が演壇で刺殺された。激化する組合運動は野火のように全国を覆い、昭和43年には全学連、中核派らと警官隊との激闘が連日繰り広げられた。

一方で建設と科学開発に拍車をかけた出来事があった。昭和33年の東京タワーの完成であり、昭和39年の東京オリンピックである。しかしその2年後、成田空港建設反対の三里塚闘争が始まった。喧噪動乱の日々がまた幕開けとなったが、一方で明るいニュースがあった。昭和44年、人類が初めて月面に降り立ち、翌年は大阪万博、昭和47年、田中角栄首相が中国を訪問、日中国交が回復したことだ。しかし暗雲ふたたび。あのベトナム戦争が始まった翌々年に成田空港建設をめぐる三里塚闘争が始まる。強引に開港に持ち込もうとした矢先の開港4日前に管制塔が占拠された。これをもって開港を2か月延期せざるをえなくなった。そしてロッキード事件、ついで昭和64年のリクルート事件が政界を揺るがせた。この同じ年、総評が解散して労働戦線が様変わりした。海外ではベルリンの壁が取り除かれ、ヨーロッパの状況が次第に変わる。時代の移り変わりの時がやってきた。この年、日本の年号は、「昭和」から「平成」となった。

「平成」も20年「昭和」と何が違う

「平成」の時代も「昭和」に劣らず、内外に大きな問題を抱えているが、「平成」の為政者にも国民にもパワーが感じられない。敗戦から立ち上がった底知れぬ力、権力に立ち向かうパワー。「昭和」はエネルギーに溢れていた。だから四六時中闘争は絶えなかったが、建設も力強く進められた。地震も台風も幾度となく襲いかかったが、自然の暴力に屈しなかった。「昭和」のパワーはどこに消えたのか。

9・11の未曾有のテロ事件の延長上での自衛隊海外派遣。新テロ対策特別措置法案がいま議論の最中だが、収賄容疑のスキャンダルや薬害C型肝炎訴訟などの重大問題が政府、与党の力を削いでいるのは間違いない。が、その一方の野党もしゃんとしていない。あの自民党を惨敗に追い込んだ選挙の時のパワーは消えた。両者とも日が経つほどに、ゴム風船の空気が抜けるように力がしぼんできた。企業も連日のようにお詫び会見を繰り返す。殺人は日常茶飯事。これまでならありえない親族間や友人間の殺人が増えている。親たりえない親たちの横暴。日本は負のエネルギーの渦に巻き込まれている。

明治維新を成した多くの志士たちのような情熱に燃えた本物のリーダーがいないのが一番の原因か。

「平成」に求められるものとは

負の渦のなかに中央と地方の格差問題がある。その解決の足を引っ張っている元凶は持ちの姿勢ではないのか。大多数の地方自治体はいまだに旧来からの発注待ちの姿勢で、さらにその発注を頼りにしている中小企業という構図はなかなか解消されないようだ。これでは力が湧いてこない。そんな絶望に近い状況のなかで、地方の格差解消への取り組みがあちこちで起きていることは希望の芽である。宮崎県はある意味で特別なのかもしれないが、そこに大きなヒントがある。自らが動くというヒントだ。ほかにもそんな活性化に成功した地方都市や町がある。それぞれに独特の知恵を出し合って議論を重ね、地場の特徴を見つめ現状のなかに宝石を見出し掘り起こしている。

地方都市町村の活性化は今の日本が元気づく上で欠くことのできない重要要素である。

何によらず自らを原動力として動く。批判、口撃、保身の弁明からは何も生産されない。自由民主党を、そして日本国を元気にするのは国民一人ひとりの自覚にかかっている。われわれ自由民主党同志会の同志はこのことを肝に銘じて新しい年を行動することである。

感謝の70年をさらなる未来へ
社会貢献を社是とし公益法人的性格を基盤に
Humanity & Heart
WB
SINCE 1938
常に時代の要請を先取りして経済の成熟にまい進
株式会社ダブリュービイ本社
東京都港区高輪4-8-33

日本創生

リーダーシップを発揮できる真のリーダーあればこそ自ずと道は開ける

行政改革が大きな課題とされる国政を向うに、本来公僕たるべき官僚組織の為体（ていたらく）があまりに目立つ国内の現状。それもこれも、国民の代表たる政治家のリーダーシップが機能されないことが要因ともなれば、これからの国政にもとめられるは、一にも二にも政治が主導を執って理念ある国家の運営にあたることは自明の理となろう。

かたや国際化の荒波に覆われたグローバリゼーションにおいて、果敢に立ち向かえる国家として何が重要であるのか。そこにある結論はひとつ、人材であることに異論はない。長らく知育偏重が謳（うた）われ、心の価値を軽んじつづけた戦後教育が、ここにきて「ゆとり教育」なる、さらなる脅威のウィルスに冒され高熱瀕死の容態に至る。いまこそ知育・徳育・体育を整えた人間力を養う教育が希求される流れは、まさに時代の趨勢ともいえようか。

初春の誌面をかざる対談に日本の好感度トップクラスの俳優、西岡徳馬氏をお迎えした。従来の政治関係者に限ったお相手を一新、広く各界からゲストをお招きした新装対談の第一弾である。西岡氏のお嬢様と福田会長のご子息とは幼稚園のクラスメイトで20年来のご縁があり、お子様の教育に熱心であることもお招きの理由にある。

教育は日本の将来を左右する。日常の礼儀やモラルが希薄となっている、学校や家庭教育のあり方、そして学力低下の著しい子どもたちの現状について、西岡氏は「心」を取りもどさねばと語る。

「礼節の国」を恐れた欧米列強

福田　はじめに自民党同志会のことを話しますと、まず自民党というのは保守合同して52年前の昭和30年11月に発足しました。そして同志会はその1ヶ月後、代議士たちではできない活動をおこなう団体として当初スタートしたわけです。初代の会長は、木村篤太郎先生という方で、この方は防衛庁長官、検事総長、法務大臣を経験している政治家でした。その後も大野伴睦先生をはじめ、およそ閣僚クラスの国会議員が同志会会長を歴任してきた歴史のある組織なのです。わたしはこの自民党同志会の最高顧問という役職に2年前から就いて、いまは事務総長という責任ある役職（※1）も兼ねているのですが、それはより団結力を備えた自民党同志会へと導くお手伝いをしようということで引き受けたところがある。

本日はこうした自民党同志会の発行する広報紙の対談ですが、芸能界からお招きしたゲストとして、ざっくばらんに語っていただきたいと思います。

西岡　ふだんは愛国のことばかりということもあるのですが、それでも毎回選挙には欠かさず家族いっしょに行きます。前回の選挙も、娘がやっと20歳になって、選挙権がもらえたというので喜んでいきました。

福田　そうですか、ファンは西岡さんにそんな大きな娘さんがいるとは思わないかもしれないが、投票に行けるということを素直に喜べるというのは、きっと教育もしっかりできたご家庭なのだろうということはわかります。

「子供は親の背中をみて育つ」というけれど、まさにそれが教育の原点です。

西岡　自分は親が厳格だったせいか、やっぱり家庭の教育もある程度、きびしくやらないとためだと…。

福田　たしかに子供というのは何もわからず、そこから教えてあげられるのはまず親しかいない。そういう点からみれば西岡さんも立派な教育者です。

西岡　わたしは兄弟が男二人で、野球部だったものですから、しごかれたり殴られたりするのは日常茶飯事で。それでも親が学校に文句をいうなんて考えられない時代でした。

福田　かつて先生といえば恩師というのが当たり前のとらえ方、聖職という認識でした。わが子を導いてくれる、知識と力と優しさを教えてくれる人であり尊敬の対象でした。戦後、昭和22年日教組が誕生し文部省と対立構図をつくり教育界を乱した。聖職者は労働者と変わりました。しかし、日本の子どもたちの学力がどんどん世界の学力から引き離されている現実は「ゆとり教育」に原因があり、それが大きいと私は思っている。にわかに「教育再生」と言ってもおいそれと改善はできません。

西岡　わたしはもうひとつ親の責任もとても大きいと思います。

先日、知り合いの娘さんが中学校の先生をやっていて、ストレスでどんどん痩せちゃったというのですよ。それは何がストレスかというと生徒の親が原因だった。たとえば子供のことで相談があるにもかかわらず、仕事があるからそれはできない、代わりに日当を出してくれるのか、などといってくる親がいるのだそうです。それを聞いて、

対談　第4回　福田晃丈の

ゲスト　西岡 徳馬さん（俳優）

【プロフィール】
西岡 徳馬　　にしおか　とくま
1946年 神奈川県横浜市生まれ。玉川大学文学部芸術学科卒業。芸能界入りは父親のすすめがきっかけだった。劇団文学座出身の演技派俳優。
文学座退団後はテレビ・映画で大活躍。時代劇から現代劇まで幅広いジャンルにおいて、つねに新たな演技に挑戦している。多数のテレビドラマ、映画、舞台において欠かせない役づくりから人気を獲得している。

どうしてこんな国になってしまったのかな、と。このままいったら日本はどうなっちゃうのかという危機感があります。

福田　いわゆるモンスターペアレンツですな。給食費などを義務教育だから、なんで自分たちが払わなきゃいかんのだと居直る輩からはじまり、これは正当なクレームではなく、いちゃもんです。教育委員会などにあることないことクレームをつけて現場の教師に圧力をかけたり虚偽の告発をする輩です。

西岡　まだわたし達は、戦前教育の影響を受けた親や教師にふれてきたことで、最低限のマナーや道徳を知っている世代かもしれないけれど、いまは道徳も何も知らされない子供たちが親になって、そうした人達が子供を育てていく。

福田　われわれの常識では考えられないすぐキレる人種、人のことなど眼中になく自分のことにしか意識がない我慢ならぬ輩。他人の迷惑も考えないという人間がそこらへんに充満している。これが今の日本です。ご存じのように日本には「児童憲章」がありますが、機能していません。昭和26年5月5日に定められた憲章ですね。しかし子供たちは大人の犠牲になっています。「心身共に健やかに生まれ、育てられ、その生活を保障される」と第一項にありますが、子どもたちの命を奪う大人がいる。それだけでなく自分の子供を殺す親たちがいるのですから、ここの2項にある「家庭で正しい愛情と知識と技術をもって育てられ……」は空文化しています。

西岡　もともと日本人は優れていて怖い国だという危機感を、戦前の欧米列強の国々は持っていたと思うのです。アメリカは戦争に勝利したとはいえ、この国の背骨を取り除くためにどうすればいいかと考えた。かつての道徳や慣習をなくしてしまおうと。その換わりにGHQは「自由」というにんじんをぶら下げ、モノを与えた。それから60年経ってツケがまわってきたのだと思います。しかし道徳やマナーとは、人間の共同生活に必要なものですからね。動物と違うのは、やっぱりこうした人間の智慧があってこそ成り立つわけですよ。

いま国のために何ができるか

福田　いま日本は、リーダーが不在であるということが大きな問題です。私は社会のなかでリーダーシップの要（かなめ）は大きく三つあると思っていて、一つは家庭のリーダー、二つは企業や組織のリーダー、三つは国のリーダーですが、家庭の親も、企業の社長も、国をあずかる政治家もいずれも崩壊しかけているのではと思わせるニュースが後を絶ちません。これは実に嘆かわしい。

自民党は参議院選挙で負けたけれど、あれは野党に負けたというより自民党そのものに負けたのだと。何かというと補助金だのバラ撒きでやってきて、それが今回の選挙の結果だと思っている。この対談は日本創生というタイトルですが、これから日本を新たに創生するとなると、やはり初心に還ることからスタートしないといかんのです。西岡さんのいうように、かっての日本人はたいへん優秀だった。私はそんな日本人の気骨は明治の時代にありと思うのです。

西岡　きのうも撮影で京都に行っていたのですが、いまやっている役柄が松平宗家の主なのです。それが将軍家に追いつめられて吉宗と闘うという内容なのですが、最後に潔く切腹して果てる役で…。よく仲間たちと話すのは、自分の腹を切って命を絶つなんてことをする民族は日本人だけだったのだろうな、と。それは想像をこえた精神の鍛錬がなければ出来ないわけで、こんなDNAを日本人は受け継いでいるわけです。

教育に話は戻りますけれど、やっぱりいまの学校教育に道徳は必要だと思いますよ。それが点数もつけられないものに時間はとれないといった、馬鹿げた発想をする教育者もいると聞いて呆れるやらで。

福田　まさにそのとおりで、教育のなかから道徳を消したらそれは教育とは言えません。徳育と言うように、道徳は教育の基本でなければならない。芸能界でも評判がいい役者は礼儀作法もちゃんとしていますでしょう。

西岡　よく敬語も満足に使えない子供を見ると、本当に可哀そうだと思います。いくら目立って人気をとっていてもどこか違う。

福田　西岡さんが小さい時分はどうでした。わたしは子供の頃「あんな大人になりたい」という親父がまわりに何人もいたが、いまの子供たちにはどうなのか。現実にまわりを見て、子供から尊敬される大人が本当に少ないのではないかと思います。

西岡　芸能界でもそうですが、以前はもっと大人の文化というのか、ドラマなどにしても大人を対象にした作品が多かったと思うのです。それがいまは子供や若者向けばかりになって、クオリティを大事にして「心」を伝えられる作品が少ないという気持ちが強いですね。

福田　そこは大きなポイントです。真のリーダーがいなくなって、どこの世界もクオリティが蔑（ないがしろ）になり、何が大切であるのかがわからなくなっている。テレビも視聴率優先、いわばお金がすべての世界になっている。

ところがリーダーというのは何があっても他人のために血を流せなきゃいかんのです。政治に話は移りますが、冷戦が終わり世界は大きく変って、外国では偉大な政治家がリーダーシップを発揮した。ロシアのゴルバチョフ然り、英国のサッチャー然り、ドイツのコール然り。ところが日本に誰がいましたか。リーダーが汗を流し、知恵を出すのは当り前で、その上でリーダーシップを発揮できる政治家がいなければ国は滅びます。戦後60年日本が復興し、自民党が果たした役割はたしかに大きい。しかし、それは自民党の功罪の功ではあるが、ここまで国を停滞させたのも自民党なのだと一人一人が自戒すべきです。子供の学力も下がる一方、教育も経済も世界と比べてどんどん低下している。

党のためなどと小さなことを言っている場合ではなく、日本のために創生しなければということが喫緊のテーマになっているのです。こうした信念でわたしは動いているわけですが、今日はお忙しいなか時間を割いてもらい、役者である西岡徳馬さんの骨太なお話をうかがえて頼もしい限りです。

（07・11・7収録）

＊＊＊＊＊

（※1）昨年の11月20日、福田事務総長は、自民党同志会最高会議において同会長へと推挙され、これを受諾した。

日本の政治をふり返る　②

自民党同志会会長／新政研究会会長

宇田國榮氏に聞く――政界縦横談

昭和63年1月発行「月刊 新政研究会」より

「愚者は経験から学び、賢者は歴史から学ぶ」とは、
かつて統一ドイツの宰相ビスマルクの言葉であった。
一寸先は闇ともされる政局の流れは、
ときに国民の予想をはるかに超越しながら歴史は動く。
前号に引きつづき、かつての自民党同志会会長であり、
岸元首相の片腕としても知られる宇田國榮氏による
過去の談話発言録をお届けする。
かつて政局が混乱を招いたことから軍部が政治に介入、
その後たどった悲惨な末路は、歴史上大きな教訓ともなろう。

掲載者 延時安典氏

政権の行方について

―竹下内閣の実現で宮沢政権の芽はうすらいだという見方をする向きもあるようですが、この点をどう見ますか。

宇田氏　宮沢氏は、財政、経済通の第一人者であり、語学も堪能で国際通でもある。総理の資格は備わっているが、残念ながら派閥の数からすると現在は竹下派に劣る。だがこれからどういう変化が起こるかわからない。やはり最有力の総理候補といえるだろう。また、竹下内閣の動向いかんによって大きく左右されるし、宮沢氏が安倍氏を抜く可能性もある。

たとえば当面の円レート問題や大型間接税問題などをうまく処理するならば、宮沢株は急上昇する。したがって宮沢氏に芽が出るかどうかはこれからであり、いまの段階は彼にとって大きな試金石の時といえる。

竹下・安倍密約説

―竹下内閣のつぎは安倍晋太郎政権という〝竹下安倍密約説〟も伝えられますが。

宇田氏　そのような密約があるのかないのか、私は知りませんが、両氏は親密な関係があることはいえるだろう。だが問題は、つぎの選挙でどの派閥がどのように伸びるかです。政界は数の大小がものをいう社会です。現在は、竹下、中曽根、宮沢、安倍の四派とも数は接近している。

今年は大型間接税をはじめ、定数是正、行政改革、教育改革などの懸案が横たわっており、特に大型間接税問題で野党側は「信を問え」と迫っている。したがって、自民党の各派は64年夏の衆参同日選を想定し、新人発掘で早くも過熱の様相を呈している。もっとも、衆参両院で百二十人を擁する最大派閥の竹下派は、政権を獲得した余裕もあり、また田中元首相が極端な拡張主義をとった結果、「逆に派内に亀裂が入り結束が保てなくなった」との反省の声から、これ以上新人を増やす必要はないだろうとのゆとりある態度を示している。

これに対し、ポスト竹下の一番手として派閥を百人の大台にのせることを悲願とする安倍は、次期総裁選をめざす新人と元議員十九人を招集し、励ますなど積極的な準備をしている。また中曽根派も「一〇〇人派閥」をめざし、中立議員や新人発掘に懸命だ。さらに、今回の総裁選で数の劣勢に泣かされた宮沢派は「派閥勢力の拡大が急務」とばかり、派内に組織本部を設置し、前回選挙の落選者を中心に二十人の候補者リストを作成するなど意欲的に動いている。河本派も前回選挙の落選者ら四人を秋の研修会に参加させるほか、新人発掘に努力している。

―次期選挙の見通しについては。

宇田氏　野党は一～二年の間にあるとみているが、野党側にその準備ができるかどうか。どのような問題なり政策に持ち込めるか。また共同政権の原動力とするのか疑問です。昨年、野党大型消費税問題では、院内ではなく院外での共闘に成功した。

派閥形成とその功罪

―宇田先生は岸信介元首相の片腕として保守合同や安保改定を成し遂げた大功労者であり、自民党の〝生き字引〟的な存在ですが、派閥の功罪についてのご意見をお聞かせください。

宇田氏　派閥は自民党のみならず、社会党、共産党などどこにもある。とくに社会党などは左右両派の対立があり両派の統一に閉口している。右派は安保、自衛隊などの問題に一歩前進し、韓国問題にも理解を示し、日米関係の強化も止むを得ないとの認識を示している。

これに対し左派は強く抵抗している。政策上の違いからくる派閥抗争は野党に強いが、自民党の場合は人材のうえで志を同じくする者があつまっており、それは主に地盤の関係、親分の手腕と力量などによる。これらの要因によっていくつかの派閥に分かれている。政策的にも野党と違い、大同小異でありながら、自民党は竹下、中曽根、宮沢、安倍、河本などの各派閥が形成されている。

自民党の前身である戦前の政友会では派閥色が濃厚となり、党内の結束が破壊され、如何ともし難い状態が原敬内閣の直後に表面化した。

それは誰を後継総裁にするかの問題で、床次竹二郎、鈴木喜三郎の両派閥が抗争し、有力メンバーは二派にわかれ熾烈な争いを展開した。両派が争い勢力が拮抗して譲らなかったため、ついにはわずか数名の子分しか持たなかった犬養毅が原総理の後を継いだ。

こうした政党内部の軋轢な派閥争いに国民的な批判や反感が高まり、その間隙をついて軍部が政治に関与するようになり、政党の力は急傾斜し、軍の体制下に引きずられることとなった。これは重大な政治的教訓であろう。

五・一五事件で犬養内閣は倒れ、政党政治は中断され、斉藤実（元海軍大将）、岡田啓介（元海軍大将）、広田弘毅（元外務大臣）の中間内閣となり、有力政治家は閣僚として入閣するにとどまった。政党内部の派閥抗争が軍の介入を招き、その力に抑えられたといえるが、太平洋戦争下でさらに政党の力は弱められた。

戦後しばらく政党政治の時代となり、自民党が政権をとったが、派閥的色彩も強まってきた。政党も会社もそれを動かすのは人であり、根本は人の問題に尽きるだろう。（次号に続く）

特定非営利活動法人　健康開発事業団

NPO法人 健康開発事業団

健康は国力の源泉にして　雇用創生は国の原動力

その位にあらずともその事を行ひ、自家の米塩を憂えずして国家の経綸に志す者は浪人なり。
則ち浪人は政府または人民より頼まるるに非ずして、自ら好んで天下のことに当たる。

東京都千代田区永田町1-11-28